



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

大学を卒業したのは約30年前である。当時の医学部6回生では、お正月を挟んで、卒業試験が、全ての診療科と修了したはずの病理学について延々とあり、私たちはその後慌ただしく医師国家試験の準備をした。今の医学部では、教養課程が2年から1年に短縮され、専門科目の履修が前倒しとなって2回生より開始される。卒業試験も、ぎりぎりの日程ではなく、秋に行われている。

昔も、医学部では講義や実習のカリキュラムがぎっしりと詰まっていた。履修内容が多いのは今と変わりはない。しかし、私たちの

〈28〉 「桜のころ」

これは、大学とは学問を学ぶ場という意識で、雰囲気も自由で学生の自主性に任せていたように思う。悪く言えば放任であるが、教

員の学生もそれなりにお互いを信頼していたのではな

今の医学部では、在学中の試験が増え、加えて4回生の全国共用試験、客観的臨床能力試験といった試験も行われるようになった。より職業教育志向であり、教育に関しては昔より親切である。見方を変えれば、より管理されていると言えよう。

卒業の前に、国家試験が行われた。学内の試験とは違

国家試験が終了して会場から帰る途上、友人たちと喫茶店で答え合わせをし、皆が大丈夫である事を確認した。これが一生で最後の試験だと思つと、限らない解放感を味わった。合格の発表は確か連休のころだったと思つ。免許の申請を行い、医師免許証が来るまでにさらに時間がかかった。研修医採用も6月1日付であった。桜の季節から、風薫る明るい空の5月が終わるまで、時間がゆったりと流れていった。解放感の中に今後の漠然とした不安や期待がけだるく混じった休暇であった。

医学生に限らず、今の若い人たちは大変だと思つ。この季節が来ると、幻想的な満開の桜の向こうに、若い人たちにとっての期待や希望や夢が続くことを願う。